

Title	現代日本語の分離動詞における2種類の一体性について
Author(s)	王, 鈺
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91593
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代日本語の分離動詞における 2 種類の一体性について

王 鈺

1. はじめに

本稿では、(1)と(2)のように、「あるもの X (分離元) からあるもの Y (分離物) を分離させる」という出来事を表す動詞を「分離動詞」と呼び、この動詞における X と Y の関係や意味特徴を明らかにすることを目的とする。

- (1) a. ボトルから栓を抜くというよりも栓からボトルを外すという感じでボトルを左右にひねりながら下方に抜く。¹ (BCCWJ, Yahoo!知恵袋)
- b. 水となじむ乳化剤や可溶化剤が、クレンジングオイルには配合されているから、白く濁ってオイルとお化粧を肌から落とす。(BCCWJ, Yahoo!知恵袋)
- (2) a. 親指の爪をきちっと切って、ヤスリで角を落とした。(BCCWJ, Yahoo!知恵袋)
- b. 次郎くんは外の木からもいできたリンゴと黄色いプラムのような実をナイフで切り刻み… (BCCWJ, 益永みつ枝『Viva!Live!よくぞ女に生まれけり』)

(1)と(2)は、いずれも状態変化動詞で、位置変化を表す日本語の分離事象表現である。このような事象では、2つの下位事象が含意される。1つは、分離元 X から一部が分離されるというように、分離物 Y の位置が変化することである。もう1つは、Y の位置変化に伴い、X の状態にも変化が生じることである。例えば、(1a)では、移動物「栓」は位置変化していると同時に、背景となる「ボトル」は、栓がなくなるという状態に変化していると捉えられる。(2a)では、動作主は、分離物である「爪」を切り捨てたと同時に、分離元である「親指」も清潔になるという状態変化が見られる。

一方、(1)と(2)のような分離動詞では、文法的振舞いで以下のような違いが見られる。

- (3) a. ??太郎は白髪を抜いて取る。
- b. 太郎は白髪を切って取る。
- (4) a. *太郎はリンゴを落として取る。
- b. 太郎はリンゴをもいで取る。

「V て取る」という形と融合できるかどうかによって考えると、両者は、同様に分離事象を表すが、(a)の動詞は、手段関係になりにくいのに対し、(b)の動詞は、分離動作の手段・様態を表すことができる。先行研究は、(a)の動詞を離脱動詞 (李 2016 など)、(b)の動詞を切

¹ 本稿では、特に断りのない限り、提示した例文中の下線はすべて筆者が施したものである。また、例文の出典を明記しない場合、筆者による作例である。

断・破壊系動詞（洪 2020 など）と呼び、ほとんどの研究は、両者を分けて考察していた。本稿は、先行研究と異なる立場を採用し、この2種類の動詞をともに分離動詞の下位タイプとして扱い、前者を「離脱型分離動詞」、後者を「分断・破壊型分離動詞」と呼ぶことにする。

論文の構成は以下のとおりである。2節では、まず先行研究を概観することで、分離事象と分離動詞の特徴を確認する。3節では、BCCWJ コーパスに基づき、意味論の観点から、動詞における分離元と分離物の関係を分析し、離脱型と分断・破壊型の分離動詞の違いを考察する。4節では、一体性変化の側面から、2種類の分離動詞における行為連鎖に説明を与える。最後に5節で結論と今後の課題を述べる。

2. 日本語における分離事象と分離動詞の特徴

日本語の分離動詞と呼ばれる「切る」などの動詞は、(5a)のように、結果補語をとり、一続きのものを分断するという状態変化を表すと多くの先行研究で指摘されてきた。一方、(5b, c)では、「から」が移動の起点を表すことで、あるもの X (分離元) からあるもの Y (分離物) を分離させるという位置変化を表している。このような分離元の状態変化と分離物の位置変化という両面性を備えた分離事象については、これまであまり考察がなされず、これらの現象が分離動詞のどのような性質に起因するものなのか明確になっていない。

- (5) a. 夏子が野菜を細かく切った。
- b. 夏子が柿の木から実をもいだ。
- c. 夏子がボトルから栓を抜いた。

Goldberg (1991) は「単一経路制約 (the Unique Path Constraint)」を提唱している。この制約によると、単文において異なる種類の経路を伴う変化を表してはならない。しかし、次の(6)のような反例が挙げられる。

- (6) a. The cook cracked the eggs into the glass.
- b. Daphne shelled the peas onto the plate. (Levin and Rappaport Hovav 1995: 60)

(6)では、「卵の殻を割る」、「豆のさやを取る」という状態変化事象を表す動詞 *crack*、*shell* と、移動の方向性を表す前置詞表現 *into*、*onto* が単文内で共存しているという言語事実が見られる。これと同様に、日本語の分離事象を表す構文「X から Y を V」は、X の状態変化を表す動詞に、Y の移動の起点を表す方向句「から」が伴っているため、単一経路制約に反する表現であると認められる。このような特徴により、分離事象表現は、「状態変化を内在する移動表現」として、移動事象の中で特殊な位置を占めると考える。

一般的に、移動事象表現の中には、移動 (Motion) の事実に加え、図 (Figure)、経路 (Path)、地 (Ground)、様態 (Manner)、原因 (Cause) という基本的な意味要素が含まれる。分離事象

が言語化される際に、最もよく現れるのは、地としての分離元と、図としての分離物という2つの要素である。

柴田(1976)は、分離物と分離元の特徴に注目し、「はがす」、「はぐ」、「むく」という3つの動詞を比較した。分離物の状態に関して、「はがす」の分離物は、「くっついて(くっつけて)ある」状態にあるが、「はぐ」と「むく」の分離物は、「本来の一部としての表面」であると指摘した。また、分離元の状態に関して、この3つの動詞の中で、「はがす」動作を受けたものは、必ずしも破れるわけではないのに対し、「はぐ」、「むく」動作を受けたものは、破れたり本体に傷ついたりすることがあると述べた。しかし、柴田は、個別の動詞の意味特徴を分析するところにとどまり、「はがす」と、「はぐ」、「むく」を異なる動詞グループとして捉えて考察していない。

本稿は、1節で述べた「Vて取る」の動作の手段関係になれるかどうかを基準とし、「はがす」、「抜く」、「落とす」を離脱型分離動詞、「剥く」、「切る」、「もぐ」を分断・破壊型分離動詞と捉える。次に分離元と分離物の関係から、2種類の動詞グループの違いを考察する。

3. 分離元と分離物の意味関係

3.1. 調査方法とデータ収集

本稿は、離脱型分離動詞に属する「抜く」、「落とす」、「はがす」、分断・破壊型分離動詞に属する「切る」、「もぐ」、「剥く」を考察対象とし、グループを分けてそれぞれの動詞における分離元と分離物の関係を考察する。

分析のための言語資料について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)』(以下、BCCWJ) およびオンライン検索システム NINJAL-LWP for BCCWJ (以下、NLB) を用いてデータを収集した。本稿は、物理的分離事象を中心に考察し、分離元 X と分離物 Y を含む構文について、「X から Y を V」と「X の Y を V」という2つの形がよく見られるため、NLB からその構文に当てはまる「ヲ格名詞」Y を抽出した。ここで注意したいのは、コーパス調査の際に、実際に X は言語化しない場合があることである。本稿では、論理的に X を想定できる分離事象と判断できれば、この構文に当てはまるものとして扱っている。また、抽出したヲ格名詞の中で、(7)のように、位置変化のみを含意するタイプ(7a)と、状態変化のみを含意するタイプ(7b)を除く。²次頁の表1は、各動詞におけるヲ格名詞のタイプ数と分離物 Y のタイプ数を示す。

- (7) a. 爆弾を落とす前から映画を撮っている。 (BCCWJ, 安野光雅著『空想書房』)
b. 刃物を使用して紙を切る。 (BCCWJ, 荒川達著『私にもできる裏打と裁断』)

² 本稿は、位置変化のみを含意するタイプを移動事象、状態変化のみを含意するタイプを完全破壊型事象と定めている。これらの事象は、位置変化と状態変化の両面性を備えた分離事象と異なり、そのヲ格名詞も分離物に該当しないと考える。

分離動詞タイプ	動詞	物理的分離物のタイプ数/ ヲ格名詞のタイプ数
離脱型分離動詞	抜く	61/611
	落とす	49/817
	はがす	56/124
分断・破壊型分離動詞	切る	46/1040
	もぐ	19/31
	剥く	25/63

表1 分離動詞における分離物 Y のタイプ数

3.2. 観察

3.2.1. 空間関係

以下、2種類の分離動詞における X と Y の意味関係を考察する前に、まず空間関係の種類を確認する。田中 (1987) は、P (X, Y) において、X と Y の空間関係を表すのが前置詞であると指摘した。英語前置詞の中で最も基本的なものは、IN、ON、AT という3つである。この3つの前置詞のコアとプロトタイプが次のように記述されている。

IN : コアは「空間」、プロトタイプは「物理的境界のはっきりした3次元の空間」である。

ON : コアは「接触」、プロトタイプは、「Y が X の水平面に接触している」である。

AT : コアは「場所」、プロトタイプは、「点」である。

田中 (1987: 333-349)

また、上記の3つの主要な空間関係以外に、OF という前置詞が表す「分離と帰属」の関係が見られる。田中 (2011) では、OF のコアを「出どころと帰属を同時に表す」と定めている。

「Y is a part of X」のように、X と Y には、地と図の相対関係があり、広義には一種の空間関係として捉えられる。本稿は、この4つの前置詞の表す空間関係を使用し、分離動詞における X と Y の関係に関して、ラベリングを行う。

3.2.2. 離脱型分離動詞の意味関係のパターン

まず、離脱型分離動詞における X と Y の意味関係を分析する。表2に、頻度の高い物理的分離物 Y の対象を示す。³

³本稿は物理的分離事象を主な考察対象とする。表2、表3では、「電源を抜く」、「歯を剥く」などの抽象化したものを除外した。なお、例文分析では、抽象的な分離事象の用例を示し、その抽象化のプロセスを述べる。

抜く	関係	落とす	関係	はがす	関係
空気	IN	汚れ	ON/AT	シール	ON
栓	ON	葉	OF	剤	ON
歯	OF	灰	AT	塗装	ON
毛	OF	化粧	ON	紙	ON
針	AT	メイク	ON	シート	ON
アク	ON	垢	ON/AT	テープ	ON
水	IN	脂肪	ON/OF	皮	OF
プラグ	ON	脂	ON	シーツ	ON
ケーブル	ON	泥	ON	ラップ	ON
コード	ON	枝	OF	ラベル	ON

表2 離脱型分離動詞における X と Y の意味関係

表2に示されるように、離脱型動詞における X と Y の関係では、4つの前置詞関係のいずれも見られる。本稿は、その意味関係について、以下の3つのパターンに分けて記述した。

【パターン1 付着・付属】: X についている Y を V (AT/ON 関係)

パターン1は、AT/ON 関係にあたるものである。3つのパターンのなかで、最も多くの用例を含み、3つの離脱型分離動詞はいずれもこの意味関係を有する。以下のような例文があげられる。

- (8) a. キッチンの油汚れや、浴室のバスタブの黒ずみなど、こびりついた汚れを落とす時に使えば… (BCCWJ, 佐光紀子著『重曹・酢・石けんナチュラルおそうじ』)
- b. 塗装などにダメージなくきれいにシールを剥がす方法があれば教えてください。
(BCCWJ, Yahoo!知恵袋)
- c. 支障はないが、待機電力節約の為、コンセントからプラグを抜くことを推奨。白
(BCCWJ, Yahoo!知恵袋)

(8a-c)はいずれも付着・付属の関係に当てはまるが、X と Y の接触の形が異なっている。例えば、(8a, b)は、Y がそれぞれ点か面で X の表面に付着していることを表す。(8c)では、Y が X に接しているだけでなく、X にきっちり固定されていることである。接触の形式によって、X と Y の密着度が異なるが、AT/ON 関係を1つの連続体として捉えることが可能である。つまり、X と Y の空間関係に基づき、パターン1における分離事象は、「X についている Y を V」で言い表すことができる。

【パターン2 中身-容器】: Xの内部にあるYをV (IN関係)

パターン2は、IN関係に当てはまるものである。3つの離脱型動詞のうち、「抜く」と「落とす」はこの関係を有する。(9)のような例が挙げられる。

(9) a. 次に、中の空気をぬいて、容器内の様子を観察する。

(BCCWJ, 『新しい科学 2分野下』)

b. 息を抜く/毒気を抜かれる。

c. 毎日の疲れを抜く/落とす/取る。

(9a)はパターン2での典型例である。ここでは、YはXの表面に接している付着・付属物ではない。Xは容器の性質を持ち、YはXの中身であると考えられる。一方、(9b)、(9c)は、(9a)から抽象化したものである。この場合、Xは人間の身体であり、Yは、Xの中に満ちていたり含まれていたりする何らかの気持ち・状態である。これはパターン2から拡張した【パターン2-1 状態-身体】に当てはまる。人間の身体を容器と想定すると、気持ち・状態は、容器の中身であると捉えられる。その中身を容器から外へ出すことで、人間の身体に状態変化が生じる。以上、パターン2における分離事象は、「Xの内部にあるYをV」で表すことが可能である。

【パターン3 部分-全体】: Xの一部であるYをV (OF関係)

パターン3は、OF関係にあてはまるが、「抜く」、「落とす」、「はがす」のいずれの動詞においても、OF関係にあたるYの種類は少ない。

(10) a. 昔の歯医者は、虫歯が進行すると、歯を抜きました。

(BCCWJ, 佐光紀子著『重曹・酢・石けんナチュラルおそうじ』)

b. それでも体脂肪を落とすには週百グラム。 (BCCWJ, Yahoo!知恵袋)

c. お腹周りに、ついた、頑固な脂肪を落とすためには... (BCCWJ, Yahoo!知恵袋)

(10a)と(10b)では、「歯」は身体部位であり、「脂肪」も体の構成部分であると考えられる。しかし、(10c)のように、「Xについての脂肪」という表現もよく使用されるため、「脂肪」は完全にOF関係として認識されているとは言えない。以上、【部分-全体】の関係に基づき、パターン3における分離事象を、「Xの一部であるYをV」と記述する。

3.2.3. 分断・破壊型分離動詞の意味関係のパターン

次に、分断・破壊型分離動詞におけるXとYの意味関係を考察する。表3に、頻度の高い物理的分離物Yの対象を示す。

切る	関係	もぐ	関係	剥く	関係
水気	ON	柿	OF	皮	OF
水	ON	実	OF	殻	OF
封	OF	手足	OF	薄皮	OF
爪	OF	リンゴ	OF	柿	OF
枝	OF	翼	OF	卵	OF
切符	OF	プラム	OF	リンゴ	OF
指	OF	羽根	OF	竹の子	OF
茎	OF	足	OF	梨	OF
根	OF	手	OF	毛	OF
髪の毛	OF	爪	OF	爪	OF

表3 分断・破壊型分離動詞における X と Y の意味関係

離脱型に現れる3つのパターンのうち、分断・破壊型では、【付着・付属】と【部分－全体】が見られる。なお、【付着・付属】は、「切る」しか持っていないのに対し、3つの分断・破壊型動詞のいずれにおいても、【部分－全体】が中心となり、大多数の用例がこの関係にあたる。

- (11) a. 山桃の樹に登って実をもいできた。 (BCCWJ, 坂東眞砂子著『桃色浄土』)
b. この大柑子の皮を剥いてください。 (BCCWJ, 夢枕獏著『陰陽師』)
c. 目を剥く/歯を剥く。

(11a)は、【部分－全体】の典型例として、分離物 Y「実」は、分離元 X「樹」の一部であると捉えられる。それに対し、(11b)では、「剥く」の Y の範囲はより限定され、「皮」、「殻」などの全体を囲む表面のようなものであり、これは【パターン 3-1 表面－全体】にあたる。一方、(11c)は、物全体の表面を剥くという意味にとどまらない。この場合、「目」、「歯」を「みかんの果肉」のように想定し、実際に分離したのは、「目」、「歯」を包んでいる「まぶた」、「口」である。つまり、「まぶた」や「口」を分離したことで、隠された「目」や「歯」を出している。人間は、怒ったり驚いたりする時、このような動作・表情を伴う場合が多いため、これはメトニミーによって人間の感情を表す慣用句に拡張している例であると考えられる。

3.2.4. まとめ

以上、分離動詞における分離元と分離物の関係には、主に3つのパターンがある。表4に、各パターンの割合を示す。離脱型では、パターン1の割合が高いのに対し、分断・破壊型では、パターン3の割合が非常に高い。また、これらのパターンでは、XとYの密着度に関して段階性が見られる。次節でその度合いについて論じる。

X と Y の関係	離脱型分離動詞	分断・破壊型分離動詞
パターン1 付着・付属	75.3%	6.7%
パターン2 中身－容器	6.6%	
パターン2-1 状態－身体	1.2%	
パターン3 部分－全体	16.9%	65.6%
パターン3-1 表面－全体		27.8%

表4 2種類の分離動詞におけるXとYの関係パターンの割合

4. 一体性変化の行為連鎖

4.1. 一体性変化による解釈

前節は、離脱型分離動詞と分断・破壊型分離動詞におけるXとYの関係のパターンをそれぞれ考察した。次に、これらのパターンの間に、どのような共通性があるか、また、2種類の分離動詞の意味関係のスキーマはどのように異なるかを「一体性変化」で解釈したい。

変件事象の種類の1つとして、井本(2016)は、「一体性変化」という概念を提起し、次のように定義している。

- (12) 実体の物理的・空間的・形状的なまとまり方に関する変化を「一体性変化」と呼ぶ。一体性変化は変件事象の下位類である。一体性変化が起こると変化主体は元のあり方では存在しなくなる(変化主体の同一性の喪失)。 井本(2016: 22)

2種類の分離動詞は、同様に分離元が元のあり方ではなくなるという一体性の状態変化を表すが、密着の度合いによって、その一体性のメカニズムが異なる。前節で述べたように、分断・破壊型のXとYの関係においては、【部分－全体】の割合が非常に高く、XとYは本来的に一続きのものとしてつながっている性質が見られる。すなわち、XとYの関係は、Yが存在した当初から、すでにXにつながっているため、XとYは本来的に連続体の性質を持つというスキーマにあたる。本稿は、このような一体性を「本来的一体性」と呼ぶ。

一方で、離脱型のXとYの意味関係のパターンでは、【付着・付属】の関係が中心となる。すなわち、XとYは本来的に連続体の性質に当てはまらず、何らかの操作のもとで、YがXに密着し、一体化して見えている。分断・破壊型における意味関係と比べると、離脱型の意味関係における一体性の程度は低く、本稿はこれを「擬似的一体性」と呼ぶことにする。

4.2. 力動性モデルに基づく行為連鎖の力的関係

次に、分離動詞における一体性変化の行為連鎖を力動性モデル(Talmy 2000)で分析する。

力動性とは、力という観点から見た際の個体の相互作用のことであるとされる。力の構造においては、本来的に活動か静止の傾向をもつ主動体と、主動体に対抗する力を加える対抗

体という 2 つの力実体が相互作用している。また、動作とその結果の生じる時間に応じて、使役と使役の結果が同時に生じるタイプ(13a, b)と使役において変化のプロセスが見られるタイプ(13c, d)という 2 つの下位タイプに分けられる。(13a, b)では、主動体「空気」と「丸太」は静止の傾向を持つが、それぞれの対抗体「扇風機」と「留め金」から継続的に強い力が加わることで、力が行使されている間において本来の内在傾向性と逆の傾向が生じる。一方、(13c, d)では、対抗体「ピストン」、「遮断バルブ」からそれぞれの主動体「油」と「ガソリン」に力が加わることで、力が行使されている間において主動体には状態変化が見られる。

- (13) a. The fan kept the air moving.
 b. The brace kept the logs from rolling down.
 c. The piston made the oil flow from the tank.
 d. The shutoff valve stopped the gas from flowing out. (Talmy 2000: 409-428)

本稿は、この力動性モデルに基づき、2 種類の分離動詞の行為連鎖を分析する。以下、図 1 は離脱型の力動性モデルを示し、その行為連鎖を(14)の 4 つの段階で記述した。

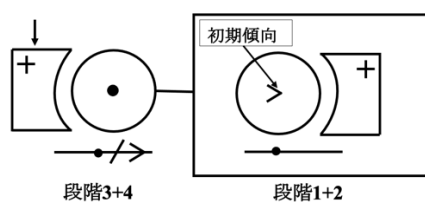


図 1 離脱型の力動性モデル

- (14) 離脱型分離動詞の行為連鎖＝
 段階 1：Y は本来的に活動する傾向にある (Y の初期傾向)。
 段階 2：接触動作でこの傾向を阻止し X と Y は一体化して見える (活動→静止)。
 段階 3：分離動作でその阻止力を外す (分離事象)。
 段階 4：Y は活動できるようになる (静止→活動)。

図 1 の右側の枠は、段階 1 と段階 2 を示している。主動体 Y は本来的に X についておらず、自由に移動できる活動傾向にある。(13b)のように、対抗体からの継続的な力が加わることで、Y は X に付着・固定され、Y の活動を阻止する。また、左側は段階 3 と段階 4 を示している。(13c)のように、分離動作というより強い力を加えることで、Y は活動傾向に戻る。

一方、図 2 のように、分断・破壊型分離動詞の行為連鎖は(15)の 3 つの段階しか持たない。分断・破壊型における X と Y は本来的な一体性の性質にあたり、1 つの連続体として、離脱型の初期傾向と異なり、Y は静止状態にある。また、(15)の行為連鎖では、(14)の段階 2 のような接触動作で傾向を阻止するプロセスがないため、接触動詞との関連性が喚起されにくい。

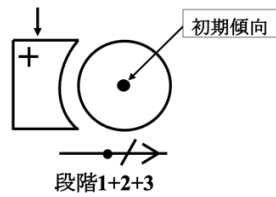


図2 分断・破壊型の力動性モデル

- (15) 分断・破壊型分離動詞の行為連鎖＝
 段階1：Yは本来的に連続体で静止する傾向にある（Yの初期傾向）。
 段階2：分離動作でこの傾向を変える（分離事象）。
 段階3：Yは活動できるようになる（静止→活動）。

5. 結論

本稿は、現代日本語における2種類の分離動詞の違いについて、分離元と分離物の関係の側面から考察し、各関係パターンとその割合を明らかにした。また、意味関係における密着度の段階性に関して、本来の一体性と擬似的一体性という概念を提起し、それぞれの特徴を記述した。そして、この2種類の一体性に基づき、力動性モデルで一体性変化の行為連鎖を検討したことで、分離物の初期傾向と段階の差を示し、接触動詞との反義関係の有無がどのように生じるかを説明できた。今後の課題として、構文的特徴などの他の視点から2種類の分離動詞の違いを考察し、意味的特性と構文的特徴はどのように関連しているかを分析する。

参考文献

- Goldberg, Adele E. (1991) *It Can't Go Down the Chimney Up: Paths and the English Resultative*, *BLS* 17: 368-378, University of California, Berkeley.
- 洪春子 (2020) 「日中韓の「切る・割る」事象における語彙カテゴリー化の対照研究」『言語研究』158: 63-89.
- 井本亮 (2016) 「「ケーキを大きく切った」をめぐって：一体性変化の修飾」『商学論集』84(3): 17-35.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 李響 (2016) 「離脱動詞と移動動詞の比較：「とれる」「おちる」を中心に」『言語学論叢』35: 75-86.
- 柴田武(編) (1976) 『ことばの意味 1: 辞書に書いてないこと』東京：平凡社.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics Volume1: Concept structuring systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 田中茂範 (1987) 『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』東京：三友社出版.
- 田中茂範 (2011) 『英語のパワー基本語：ネイティブ感覚の英語力アップ』東京：コスモピア.